

研究課題	外国語教育のためのデジタルポートフォリオ開発に向けて
副題	～CEFR を活用した複言語能力の育成～
キーワード	外国語教育、ICT 活用、デジタルポートフォリオ
学校/団体名	奈良県立国際高等学校
所在地	〒631-0008 奈良県奈良市二名町1994番地12
ホームページ	http://www.e-net.nara.jp/hs/kokusai/

1. 研究の背景

奈良県教育委員会は、これからのグローバル社会を牽引する人材を育成することを目的とし、令和2年4月に奈良県立国際高等学校を開校した。国際高校では、「国際≠英語、英語だけじゃない。真の国際人を目指して」をモットーに、日本語、英語に加え、学校設定科目「世界の言語」において5カ国語（中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語）を全生徒が学ぶカリキュラムを構築している。また、帰国生や多くの留学生を受け入れるため、個々の学習者の言語レベルを適切に把握することは、教育活動を円滑に実施する上で極めて重要となる。3年間を通じて、全生徒の言語能力全般を育成していくため、CEFR[ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）]を活用しながら、学習者のメタ認知を喚起し、主体的に学習に取り組むことができるような言語ポートフォリオシステムを開発していく必要がある。

なお、国際高校は、県内公立高等学校のモデルとして、BYODによるタブレットを活用した授業を実施する。本年度は導入初年度であるため、利用規程の策定や端末操作の支援などにより、タブレットを活用した教育活動が円滑に進むような環境を整えることが必要不可欠である。この実践は、今後全ての県内公立高校で活用できると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、学校設定科目「世界の言語」、国語（日本語）、英語等複数の言語に関する教科・科目において、学習者自身が文章、音声や映像などの学習成果をタブレット端末に記録し、共通の準拠枠に基づいて自らの言語能力を俯瞰的に捉えられるようになることを目指す。

また、これらの電磁的な学習記録を教員が分析し、共通準拠枠及びルーブリックを用いた多面的な評価の在り方について研究を進め、試行版「My languages Portfolio」を作成し、各言語で活用する。

最終的には、どの言語や校種でも使用できるCEFRを活用したデジタル言語ポートフォリオシステムの開発を目指す。開発されたシステムは、公開研究会、学会等を通して、今後、奈良県にとどまらず他地域の多様な言語・校種において、活用していくことができる。まず、初年度は、試行版の課題等を検証する中で、システム開発に向けたコンテンツ、構成、内容を検討することを目標とする。

なお、上記の目標を達成するために、年度当初に、タブレットやその他の ICT 活用に関する教員研修を実施する。また実践事例を共有することで、タブレットを活用した教育活動が円滑に進むような環境づくりを積極的に行う。

3. 研究の経過

新型コロナウイルス感染症防止のための臨時休業や、その後の感染拡大対策のために、申請時の計画からは大幅な変更が必要となった。実際に行なった研究の経過を表1に示す。また、学校設定科目「世界の言語」の実施内容を表2に示す。

表1. 研究の経過（「世界の言語」実施内容以外の項目）

時期	取組内容	評価のための記録
4月～	新型コロナウイルス感染症防止のための臨時休業 ICT環境に関する教員研修 課題をClassiやSchoolTaktを用いて配布・回収 各種の教員研修を実施	情報交換 提出課題(Classi、SchoolTakt活用) アンケート(Google Form活用)
5月12日 ～19日	Zoomによる朝のHRの実施。健康観察と学校再開に関する連絡。 Google Formを用いた生徒の健康調査	アンケート(Google Form活用)
6月1日 ～12日	学校再開(分散登校) iPadを用いた授業開始	音声データ等の学習課題(SchoolTakt活用)、写真
8月19日	第1回世界の言語検討・研究推進委員会	意見交換、所感
9月26日	オンライン学校説明会(実施に関する講師(株)コードタクト 住ノ江修氏)	参加者アンケート、所感
10月28日	Zoomによる遠隔授業(NPO法人モンキーマジック代表 小林幸一郎氏)	生徒アンケート(Google Form活用)
11月25日	言語学習に関する講演会(奈良教育大学 吉村雅仁氏)	生徒アンケート(Google Form活用)
12月16日	第2回世界の言語検討・研究推進委員会	意見交換、所感
1月20日	Zoomによる遠隔授業(NPO法人きららの木 田崎智咲斗氏)	生徒アンケート(Google Form活用)
	イングリッシュビレッジ(国際教養大学からのZoomによる遠隔授業)	生徒アンケート(Google Form活用)
3月3日	第3回研究推進委員会	研究総括、生徒振り返りデータの分析
3月25日 (予定)	第3回世界の言語検討委員会(総括・次年度に向けて)	総括、次年度に向けての計画立案

表2. 令和2年度「世界の言語」実施内容

	予定日	1組	2組	3組	4組	5組	
第1回	6月3日(水)	オリエンテーション(分散登校)					
第1回	6月10日(水)	オリエンテーション(分散登校)					
第2回	6月17日(水)	仏①	独①	中①	韓①	西①	第1 ターム
第3回	6月24日(水)	仏②	独②	中②	韓②	西②	
第4回	* 7月1日(水)	仏③	独③	中③	韓③	西③	
第5回	9月9日(水)	韓①	西①	仏①	独①	中①	第2 ターム
第6回	9月16日(水)	韓②	西②	仏②	独②	中②	
第7回	* 9月23日(水)	韓③	西③	仏③	独③	中③	
第8回	9月30日(水)	独①	中①	韓①	西①	仏①	第3 ターム
第9回	10月7日(水)	独②	中②	韓②	西②	仏②	
第10回	* 10月21日(水)	独③	中③	韓③	西③	仏③	
第11回	10月28日(水)	西①	仏①	独①	中①	韓①	第4 ターム
第12回	11月4日(水)	西②	仏②	独②	中②	韓②	
第13回	* 11月11日(水)	西③	仏③	独③	中③	韓③	
第14回	11月18日(水)	中①	韓①	西①	仏①	独①	第5 ターム
第15回	11月25日(水)	中②	韓②	西②	仏②	独②	
第16回	* 12月2日(水)	中③	韓③	西③	仏③	独③	
12月末	12月末	選択言語登録					
第17回	1月13日(水)	デジタル言語ポートフォリオを用いた振り返り					
第18回	2月10日(水)	日本手話+オリエンテーション					

※を付した日は、ネイティブスピーカーを招いて授業を行った。

4. 代表的な実践

A) タブレットやその他のICT活用に関する教員研修を実施、および実践事例の共有

年度当初の臨時休業中の時期を活用し、管理職を含む本校教員全員に対し、①校内におけるiPadの操作・活用方法に関する研修、②iPadを用いた協働学習・アクティブラーニングを行うためのアプリ「School Takt」の使用・活用法に関する研修、③AI型タブレット教材「Qubena」の使用・活用法に関する研修、および④学校ICT化プラットフォーム「Classi」の使用・活用法に関する研修を行った。また、これらの研修で学んだことを活かし、各教科担当者および担任は、在宅教育と生徒の生活指導を行った。さらに、Zoomを用いて生徒の健康観察などを行うことで、休校中でも学びを止めない取り組みを進めた。

学校再開後も各教科担当者は、タブレットやその他のICTを活用することで、特色のある教育を実施した(図1, 2)。それぞれの実践内容は、お互いに授業見学を行うことで共有し、授業改善に努めた。

B) 試行版「My languages Portfolio」の作成

学校設定科目「世界の言語 I」(表2、図3)において、学習者自身が学習成果をタブレット

端末を用いてアプリ「School Takt」に記録する、デジタルポートフォリオシステム「My languages Portfolio」を開発した(図4)。さらにこのシステムと CEFR に基づいた自己評価(表3)を組み合わせることで、生徒に自らの言語能力を俯瞰的に捉えさせることができた。また、これらの学習記録や自己評価の内容を教員が分析し、多面的な評価の在り方について研究を進めた(詳細な内容については、「研究の成果」参照)。

また、「世界の言語」では、5カ国語(中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語)を全生徒が学ぶという、全国的に見て先進的な授業であるために、全国紙でも大きく取り上げられた(2020年9月27日朝日新聞全国版)。



図1. タブレットを用いた授業風景(グローバル探究)



図2. タブレットを用いた授業風景(生物基礎)



図3. 「世界の言語」の授業風景

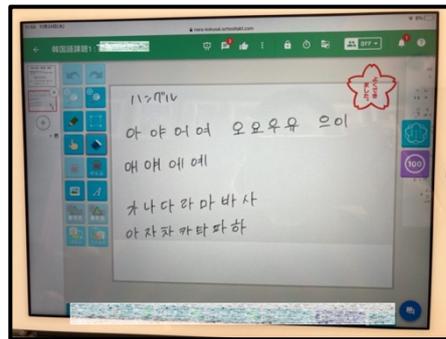


図4. SchoolTaktでの生徒の学習記録

5. 研究の成果

本研究における成果を検証するため、アンケートを行った。

アンケート概要

実施時期 令和3年1月13日(水)(すべての言語が終了した後の世界の言語の時間)

実施方法 生徒がiPadでGoogleフォームに回答する

有効回答数 134件

内容

- ・ My languages Portfolio に記録した5言語の自己紹介文や自分の音声などを振り返る。
- ・ シラバスにあった各言語の目標達成状況を自己評価する。
- ・ 4月に比べて自分の言語能力がどれくらい変わったかを自己評価する。
- ・ 自由記述で世界の言語全般を振り返る。

成果① 指導目標の達成

年度当初に各言語で8～10個の到達目標を設定し、全生徒にシラバスで示した。差異はあるものの、それぞれの言語で60%～80%の生徒が目標を達成したと肯定的に捉えている。

例：スペイン語の到達目標	
①音と発音のルールを理解できる	②自信をもって発音ができる
③アルファベットが言える	④あいさつができる
⑤簡単な自己紹介ができる（モノログ）	⑥スペイン人の先生と簡単な会話ができる
⑦スペインの日常生活や文化について知る	
⑧メキシコの伝統文化「死者の日」について理解できる	
⑨スペイン語が話されている国や地域の理解をふかめる	

成果② 生徒の言語4技能の伸び

中国語、韓国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語の5言語における4技能（話す、聞く、書く、読む）の伸びについては、CEFR_PreA1を参考に質問項目を作成した（表3）。また、日本語と英語に関しては、それぞれCEFR_C-2、とB-1を参考に質問項目を作成した（表3）。4技能についてそれぞれ、①全く変化していない、②少しだけ変化した、③まあまあできるようになった、④かなりできるようになった、の4項目で自己評価させ、③もしくは④と答えた生徒の割合をグラフで表した（図5）。

ほぼすべての生徒にとって初習であった5言語について、自分自身の学習を振り返り、当該言語を学ぶ前に比べて4技能が向上したと捉えることができている。それだけでなく、5言語を学んだことで、日本語や英語の言語能力も向上したと捉えている生徒が半数近くいることがわかった。

表3 CEFRによる各能力の判定基準

	CEFR_PreA1 (5言語)	CEFR_B-1(英語)	CEFR_C-2(日本語)
話す	定まったかたちがあればその言語を話すことができる	自分の興味関心のある話題について、首尾一貫して、おおむね流暢に分かりやすい説明ができる。	はっきりとすらすらと流暢に、構成がしっかりとした話をする事ができる。
聞く	短くごく簡単なその言語の質問や発言を聞いて理解できる	明瞭で標準的な話し方であれば、概要と詳細を確認しながら、日常生活や仕事に関係する話題についての、簡単な事実に基づく情報を理解できる。	速めの自然なスピードで話されても、事実上あらゆる種類の話し言葉も容易に理解できる。
書く	お手本をみながらその言語を書くことができる	身近で個人的に関心のある話題について、首尾一貫させて、繋がりのある分かりやすい文章を書くことができる。	複雑な文章を、わかりやすく、すらすらと、適切で効果的な文を書くことができる。
読む	絵などの助けをかりることで身近な内容を読むことができる	自分の専門分野や興味に関係する事柄で、簡単な事実に基づくテキストを、十分な理解をしながら読むことができる。	抽象的で、構造的に複雑な文、古典の文書も読むことができる。微妙な文体の違いや、明示的な意味だけでなく、暗示的な意味も認識しながら、幅広い長めの複雑なテキストを理解できる。

成果③ デジタル言語ポートフォリオの生徒への返却

各言語における4技能の伸びについて、図6のような個別シートを作成し、生徒にフィードバックすることで、生徒が自分自身の言語能力を俯瞰的にとらえる機会となった。

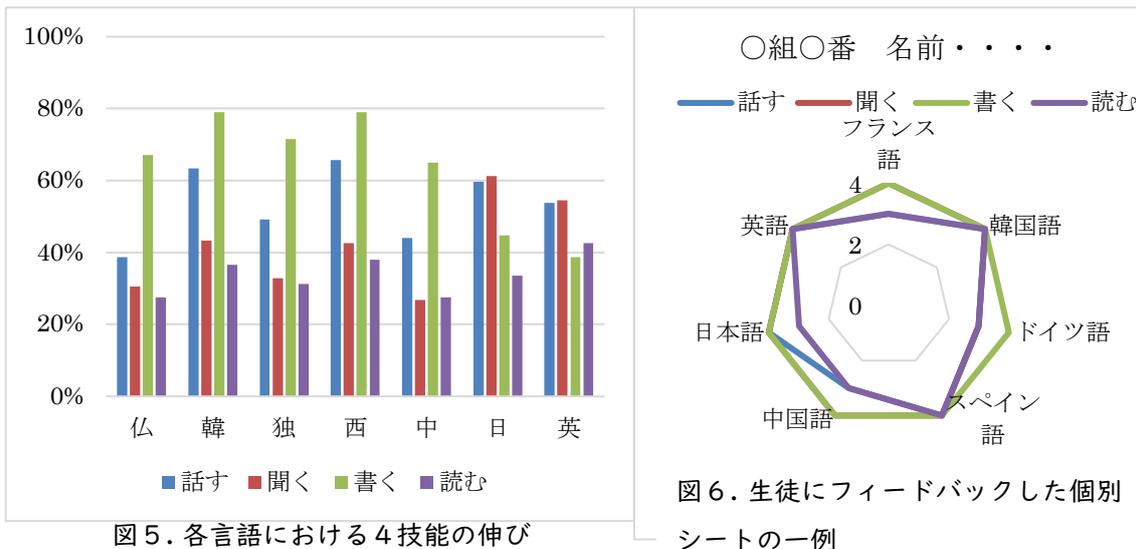


図5. 各言語における4技能の伸び

図6. 生徒にフィードバックした個別シートの一例

6. 今後の課題・展望

本年度の実践研究をさらに発展させるために、2021年度パナソニック実践研究助成に応募している。この研究においては、以下の2点の項目を実施する予定である。

① 応用可能なデジタルポートフォリオシステムの開発

2020年度の成果を受け、2021年度の申請では、1年目の成果を発展させ、どの言語や校種、教科でも使用できるデジタルポートフォリオシステムの開発を目指す。

② オンライン国際交流の実践・ノウハウの蓄積

2年生を対象とした「世界の言語II」において、ZoomやGoogle Meetなどの遠隔コミュニケーションツールを用いて、海外のネイティブスピーカーとオンラインで交流する機会を設け、コロナ禍でも世界とつながる複言語教育を実践していく。この内容については、本年度に予備的調査を実施できたので、来年度はさらに発展した取り組みが可能となる。

7. おわりに

今年度は、実践研究助成を頂いたことで、ICT機器の整備ができ、大変感謝しております。当初予定していた講師の招聘や研究会の実施はできなかったために十分な研究実践を行うことができませんでしたが、オンラインサポートを受けて、良い研究活動ができたと思います。本研究を行う上で、オンラインサポートに関わる先生方、特に明星大学の今野貴之先生には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

8. 参考文献

(1) 吉村雅仁(2020)、外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム(GOETHE INSTITUT)、基調講演

(2) パナソニック教育財団『平成30年度成果報告書』

http://www.pef.or.jp/school/grant/evaluation/h30_evaluation/